

松山大学論集  
第二十四卷第四十二号  
平成二十四年十月発行

# 米方年行司に関する一考察

——史料紹介を中心に——

高  
槻  
泰  
郎

# 米方年行司に関する一考察

——史料紹介を中心に——

高 槻 泰 郎

## はじめに

近世日本の幣制は三貨制度と呼ばれる。すなわち、東日本にあつて決済通貨となつた金、西日本のそれである銀、そして補助貨幣としての錢、この三貨によつて成り立っていた。この馴染み深い理解に対して岩橋勝氏は、これを相対化する論稿を精力的に発表している。<sup>(1)</sup>直近で発表された論稿の中で岩橋氏は、近世日本の各地域が、それぞれの直面した貨幣需要と貨幣供給を所与として、最適な決済手段を適宜選択する姿こそが、近世期貨幣制度の真の姿であり、東の金遣い・西の銀遣い・補助貨幣としての錢という画一的な理解は実態と乖離していると明快に主張している。<sup>(2)</sup>

(1) 代表的な研究のみを摘記するならば、岩橋勝「小額貨幣と経済発展」『社会経済史学』第五七卷第二号、一九九一年七月、一一二頁、同「江戸期貨幣経済のダイナミズム」『金融研究』第一七卷第三号、一九九八年七月、五九一八〇頁、などが挙げられる。

このように主張する以上は、市場しじょうという抽象的な機構を論じて事足りりとするのではなく、市場いちばのレベルに下りて貨幣流通のあり方を論じ、背後にある構造を浮き彫りにしていく作業を繰り返さねばならない。かつての制度叙述的、貨幣改鑄史的研究手法を乗り越えて、貨幣流通の実態を通して経済発展の有り様を考察する「貨幣の経済史」という手法を打ち立てるべき、との岩橋氏の主張は、後進に与えられた宿題でもあり、道標でもある。

かく言う筆者は抽象的な意味での市場を論ずることで事足りりとしてきた張本人であるが、氏の提唱される「貨幣の経済史」の薰陶を受けた者として、本稿では大坂米市場における米取引の実態を示す史料を紹介することで、学恩の万分の一に報いたい。

## 一、富子家と米方年行司について

大坂米市場を巡る研究は枚挙に暇がない程、積み重ねられているが、共通して指摘できることは、市場いちばにおける取引実態がほとんど解明されていないという事実である。世界初の先物市場として名高い大坂米市場にあって、具体的にどのような取引が行われていたのか、十分に解明されていない。例えば、正米商内あきない（スポット取引）においては、約定から四日以内の現銀・現物決済が原則であったことが知られているが、はたして実際に現銀で決済されたのであろうか。銀目手形で決済されたかもしれないし、あるいは米仲買間の長期的な取引関係を前提に帳簿上で差し引きをするのみで、「潰れ」とならない限り、決済を閉じることがなかったのかもしれない。

このような基本的な事柄すら解明できていない状況をもたらした要因の一部は史料制約に求められるが、

史料渉獵が十分に及んでいないこともまた事実である。そこで本稿では、右の疑問に直接答えるものではないが、管見の限りではこれまで利用されてこなかった、大阪大学経済史・経営史資料室所蔵「富子家文書」所収「米方年行司相勤候節扣」（史料番号五―一六）と題する史料を紹介することで、ささやかながら、前進を遂げたい。

当該史料は表題の通り、富子家・米屋助右衛門が文化元年（一八〇四）、同四年（一八〇七）に米方年行司を務めた際に作成されたものである。富子家については、文書所蔵機関である大阪大学経済史・経営史研究室が解説を与えている。<sup>(4)</sup> それによれば、富子家は元禄期（一六八八―一七〇四）に京都伏見から大坂に移り住み、正徳年間（一七一―一七二六）に尼崎二丁目において米上積問屋を開業したとされる。初代の米屋助右衛門（享保二二年（一七二七）没）から数えて六代目助次郎（明治一三年（一八八〇）没）の代に明治維新を迎えている。

富子家は、大坂から京都へと米を卸す上積問屋をはじめ、豊後岡藩、伊予新谷藩などの蔵元業務もこなし、大名貸も展開したとされるが、米仲買株を持つ、米仲買としての顔も持っていた。<sup>(5)</sup> 米仲買株仲間の頭役に当たる米方年行司を二度にわたって務めたことは、富子家が米仲買として相応の地位にいたことを示唆している。

（２） 岩橋勝「近世貨幣経済のダイナミズム」『社会経済史学』第七七巻第四号、二〇二二年二月、三一―三五頁。

（３） 右掲論文、三頁。

（４） 大阪大学経済学部経済史・経営史研究室編「富子家（旧大坂両替商）旧蔵文書目録」『大阪大学経済学』第三〇巻第一号、一九八〇年六月、一一〇―一一八頁。

（５） 「乍憚口上（堂島米市場仲買株札譲渡一件）」（富子家文書、四―一四）によれば、四代助右衛門は、文化五年（一八〇八）八月、病身を理由に、米仲買株一枚を返上する意思を米方年行司に伝えている。ただし、商売向きが回復した場合、あるいは親類に譲ることになった場合には下げ渡して欲しい旨が明記されていることから、株を申請したものと同理解できる。

米方年行司については、戦前以来の研究蓄積があり、その内容を整理すると以下である。<sup>(7)</sup>享保一五年（一七三〇）に堂島米会所における米切手取引、米切手先物取引が公認され、その翌年、翌々年にかけて米仲買株仲間が結成される。この時、米方年行司が、五名の米仲買が一年任期で務める機関として設置され、<sup>(8)</sup>以後、米仲買の取り締まり、取引を巡る紛議の裁定、大坂町奉行所への相場書上、町触の伝達などの任務に当たることになる。宝暦一二年（一七六二）には空米切手改めを補佐する者として加役五名が配置される。<sup>(9)</sup>

米方年行司の任命は大坂三郷惣年寄の人選によって大坂町奉行が行っていたが、安永三年（一七七四）より、現任の米方年行司が後任を指名し、任命に惣年寄が立ち会う形となった。<sup>(10)</sup>米仲買から大坂町奉行へ願書を提出する際には、事前に米方年行司による「内札」を受ける必要があり、米方年行司の奥印を欠いた願書は受理されなかったことから分かるように、<sup>(11)</sup>米方年行司は私的な仲間組織の頭取ではなく、幕府によって編成された公的な仲間組織の頭取として機能したのである。

以上によって概略は押さえられたものの、具体的な業務内容は依然として不透明である。その一端を埋める史料が、以下に紹介する「米方年行司相勤候節扣」である。横帳で五丁から成るが、一部に反古紙を用いていることから、自家保存用の手控えとして作成されたと判断される。以下に史料全文を掲示し、若干の解説を試みたい。

## 二、史料翻刻<sup>(12)</sup>

〔袋上書<sup>(13)</sup>〕

文化元年甲子始而相勤

同 四年丁卯相勤

米方年行司相勤候節扣

〔表紙〕

米方年行司役

初年 享和四年甲子 但此年改元文化ト改

其次 文化四丁卯

(6) 田中太七郎『日本取引所論』有斐閣、一九一〇年、三〇―三三頁、須々木庄平『堂島米市場史』日本評論社、一九四〇年、五六―六九頁、島本得一『徳川時代の証券市場の研究』産業経済社、一九五三年、五二―五四頁。

(7) 以下に示す内容は、史料の裏付けが確認できるものに限る。

(8) 米方年行司の呼称は享保一七年(一七三二)一月より公的に用いられており、それ以前は「五仲買」、「惣代」などと呼ばれていた(拙著『近世米市場の形成と展開―幕府司法と堂島米会所の発展―』名古屋大学出版会、二〇一二年、三八頁)。

(9) 「浜方記録」本庄栄次郎他編『近世社会経済叢書』改造社、一九二六年、六一―六二頁。当該期の空米切手問題については、右掲拙著二〇三―二一頁を参照のこと。なお、加役は安永四年(一七七五)より三人に減じられる(「浜方記録」七五頁)。

(10) 「三郷惣年寄由緒書并勤書」大阪市参事会編『大阪市史 第五』大阪市参事会、一九一一年、一六六頁。このような変更が行われた背景は明確でない。

(11) ただし、米方年行司自身が訴訟上の利害関係者に当たる場合は、町年寄の奥印でも出訴が可能であった。この点については、前掲註八の拙著、第五章第三節を参照のこと。

(12) 翻刻に際して、合字の「より」は平仮名の「より」とし、正字・旧字・異体字は常用体に改めた。紙幅の都合により、平出・欠字は省略し、行間の空白についても、それ自体に意味はないと判断した場合はこれを詰めた。なお、史料文中の亀甲括弧内の文字、および説点は筆者が加えたものである。

(13) 袋裏面に「大坂梶木町淀屋橋西へ入、尼崎屋七右衛門」の印があるが、尼崎屋から送られた通帳などが入っていた袋を再利用したものと判断し、翻刻文からは割愛した。

〔二丁表〕

享和三癸亥年十二月

濱方年行司相勤候控

何町何丁目

何屋誰

右御用之義有之間、明廿一日五ツ時、東御番所へ麻上下印形用意可被出候、尤着到三郷寄合所へ相断可被申候以上、

十二月廿日 天満組惣会所印

右差紙到来、五ツ時可罷出之處、古役・新役多人数之上、相場寄在之、旁昼後東下宿近江屋九郎兵衛方へ不殘相揃ひ、仕度等致し扣居候、

右相揃候趣、古役衆より惣年寄衆へ相断、川崎次左衛門・野里雄作兩人之掛り二而無程案内在之、古役・新役相揃ひ、地方役所へ出候、与力大西駒藏殿懸り、

享和三癸亥年

西村屋嘉右衛門

堺屋善藏

古役

鍋屋三右衛門

播磨屋善四郎

難波屋太助

右者退役願之趣聞届、当年中無滞被相勤、大儀之挨拶在之候

享和四甲子年

加役

長田屋卯兵衛  
俵屋与八

米屋熊次郎

天王寺屋源之介

印形所持袴羽織無刀

阿波屋嘉藏

新役

伊勢屋茂助

此方

播磨屋仁兵衛

右同断

加役

大坂屋文藏  
鍋屋善次郎

灘屋義兵衛

〔二丁裏〕

右誰々江年行司役、誰々へハ加役申付ル、不念之儀無之様相勤可被申、御請ハ麻上下着いたし、衣服相改メ御請可申上旨被仰渡候、尤奉畏候と申置、扱町年寄役相勤居候付、此段書付ニ而相断可申、則左ニ

乍恐口上

一、今日被為御召出、来子年米方年行司役被為仰付、冥加至極難有奉存候、然ル処、私義何年以前より町内年



寄役被為仰付、相勤罷在候付、自然御用等之節差支可有御座哉と甚奉恐入候、依之何卒米方年行司役御赦免被為成下候者難有奉存候、此段乍恐書付ヲ以奉願上候、以上、

何町何町目

月日

何屋何右衛門印

御奉行様

大西駒藏殿掛りニ而右之趣相断候得共、書付納り不申候、自然差支候砌者町内月行司ヲ以相勤、兼帶可致旨被仰付候、

扱衣服相改メ、古役ハ継上下、新役ハ麻上下、新古相揃ひ地方役所縁側江出、古役無滞相勤退儀退役聞届ケ、新役来子年年行司相勤可申、尤不念之儀無之様、則請証文読為聞、調印可致旨被仰付候事、

但 此請証文相下り、下宿ニ而調印いたす事も有、又衣服相改メ不申内調印いたす事もあり、其時宜ニ寄也、請証文之写米会所ニ有、

扱直様川方・宗旨方・当番所と御請御礼申上ル、夫より中ノ口より上り、本玄関江罷出、御奉行様へ御請〔二丁表〕

御礼申上ケ申置、夫より又西御番所へ出、中ノ口より上、本玄関江出、御請申上置、夫より当番所并三役所いつれも御礼申上ル、東西とも惣年寄衆案内有之事、

夫より御藏奉行・天満与力同心衆・三郷惣年寄衆宅江不残夫々手配りいたし、御請廻礼罷越候、年行司役勤中ハ町役一役御免被仰付候、借屋之分ハ町入用之儀御免ニ相成、

但 他町ニ而掛屋敷所持之内ニ而御免之儀願上候得者、御聞届ケ有之由、此時ハ掛屋敷有之其町内年寄ニ

而も、月行司二而も、惣年寄中より呼出二而被申渡候事、

尼崎町二丁目

一、用事有之候間、明廿五日四ツ時、印形持参被致可候、以上、

十二月廿四日

天満組惣会所印

翌廿五日四ツ時、月行司炭屋喜右衛門印形持参致候処、其町内年寄誰江、来子年米方年行司役被仰付候間、町用之処年寄相勤可被申候得共、自然差支之節ハ、無不念月行司ヲ以相勤可被申候様、尤米方年行司勤中ハ町役一役御赦免被成候事、此儀も申聞置候、川崎虎之丞殿掛り也、

堂嶋米会所古役衆より明幾日何時御取合申上度義有之候間、御出席可被下候旨、廻書二而案内有之候、刻限参、相揃、暫扣居ル、無程案内有之、年行司之居間へ通り、新古同席、扱、ケ條書并申遣り之事共申述べられ、請答いたし、書物单司<sup>マ</sup>之鑑も受取可申処、いまた古役用向有之候付、跡より御渡し可申旨被申、夫々取渡相済候得者、酒肴・吸物出、新古両役頭より盃相始メ、古役頭

〔二丁裏〕

之盃ヲ新役之二人目へさす、新役頭之盃古役之二人目へさす、千鳥かけに成、新古盃事相済候ハ、水方之者呼出し、新役ヨリさし遣し候、是又盃相済候ハ、若キ者共之頭一人ヲ呼出し、是又新役より盃差遣候、相済候而新古とも酒事相済、一汁二菜二而飯出、茶碗むし・小鯛焼物也、食後咄合候事共有之候ハ、諸事仕舞、古役より先キへ退出、扱新役退座いたす事例格也、此時奉行所年頭之御礼刻限、又ハ出合所等申合置、

但 此取渡、幾日と申事不定候得共、大体廿五・六日頃之間見合、取渡いたし候事、

享和四年甲子正月四日

初相庭淀屋橋多田屋新右衛門方江例歳打寄、言合出来、上米・中米・下米と三段、各升算当り読合等いたし、相済候上、多田新より組重にて酒差出し、同役中盃いたし、見舞に見得候仁へも盃事いたし候、尤親しき仁計り也、其中相庭相仕舞、四ツ時頃立合場へ出勤、加人大文・鍋善・灘儀<sup>マツ</sup>三人見得候、尤前刻案内いたし置古役衆も見得可申筈之処、不快・用事等何連も断被申不参、加人三人ハ出勤二而、扱御頼申候ハ、銘々繰合いたし、米改出勤、其外御用之差支候砌ハ御頼申候間、其節乍御苦勞御三人之内、御繰合御出勤可被下候様、御頼置候、今日各様方御呼立申、御頼申候も如何ニ候得共、任先格御呼立御頼申候など挨拶申伸候、扱御酒一献遣し可申と申、盃出、夫々盃事相済、一汁二菜・湯漬差出候、

翌五日

寅ノ刻限淀屋橋二而前日之通相場立合、多田新へ打寄立合いたし、卯ノ刻頃、火縄限り相庭仕舞、引取

〔三丁表〕

六日夜 毎月五日・六日頃之夜、月行司寄

月行司江立物入札并月並箇條書請印取可申趣、前日より案内為致置、依之今夕月行司一統より建物入札別封にいたし差出候、五人立合開封いたし、入札数多キ蔵之分、来ル八日堂嶋ニて初相庭立物に相極メ可申事、扱、ケ條読聞ケ印形取之、月行司退出、

月行司相揃ひ迄、同役五人酒出、待居候、

肥前札 二百二十

筑前札 七十余

右之通二而、八日よりの建物肥前に相成、

七日朝

五ツ時頃、立会所江継上下持参罷出、東奉行所江明八日於堂嶋市場、肥前米ヲ以商売仕候之趣、口上書へ実印連判二而相断、出勤阿波嘉・はり仁兩人罷出候、伊勢茂・此方兩人ハ、

加賀 岡 備前 筑前 出雲 肥後 豊前

右蔵屋敷留主居并米支配役人衆へ年行司連名之名札ヲ以年頭札相勤、引取

肥前 南部 ハ奉行所より帰り道、阿波嘉・播仁兩人相勤候事、

八日

堂嶋初相庭立合いたし、御書上ケ読合相済、引取、

十五日

西御奉行佐久間備後守様、旧冬より御忌中二而、其間東御奉行水野若狭守様御勤、昨十四日御忌明二而、年頭御札諸祝物北組惣会所へ差出可申旨二而、同役中一統申合、北組惣会所へ上ケ物持参、掛りの惣年寄江川・川崎兩人也、尤年頭祝儀并歳暮祝儀、其外町年寄祝儀等、一時二相来候而差出候事、

〔三丁裏〕

廿一日

鍋嶋蔵屋舗役人中惣代として高尾藤十殿、三本人扇子一箱、年札持参被致候事、

廿四日

帳合米立消并明廿五月初天神ニ而休日之趣、西御月番之地方役所并当番所へ、天源・伊勢茂両人届ケ罷出候、

廿五日

明廿六日より相始メ候趣、阿波嘉・此方両人西当番所江相断ニ出、

二月十日

初午ニ而古役衆相招キ候事、此方岡屋敷へ出、七ツ半時頃会所へ出、

此相庭書、文化四年丁卯正月の事也

立会場言合ハ、恵比須講仲間順番ニ而、三軒より言合ヲ差出、三軒分引合、直段高下有之時ハ、中直ヲ以  
言合相定可申事、会所相庭帳

正月廿九日

正筑前米寄付 六十二匁

同 引方 六十二匁

石

一、筑前米 六十二匁

上

石四

一、肥後米 六十二匁三分

升 五十九匁九分

九八

一、肥前米 五十六匁二分

升 五十七匁三分

八五

一、中国米 五十一匁五分

升 六十匁六分

九六

一、広嶋米 五十七匁五分

升 六十目

石三

一、備前米 六十匁二分

升 五十八匁四分 中

九

一、米子米 五十匁六分

升 五十六匁二分 下

八

一、出雲米 四十六匁五分

升 五十八匁一分〔朱書にて記号、「b」のような形状〕

九三

一、古筑前 五十四匁五分

升 五十八匁六分

九八

一、古肥後 五十八匁五分

升 五十九匁七分〔朱書〕中

〔四丁表〕

九二

一、古肥前 五十三匁五分

升 五十八匁一分

七八

一、古中国 四十七匁八分

升 六十一匁三分

八八

一、古広嶋 五十四匁五分

升 六十一匁九分〔朱書〕上

八八

一、加賀米 五十匁五分

升 五十七匁四分 〔朱書〕 下

一、淡路 六十一匁五分

一、筑後 五十八匁二分

一、豊前 六十目三分

一、薩摩 五十三匁八分

一、岡米 五十七匁

一、柳川 五十六匁八分

一、秋田 四十四匁三分

一、岡大豆 五十七匁五分

一、大洲大豆 五十六匁五分

一、南部大豆 四十二匁五分

筑前帳合寄付 六十五匁

但、廿七日寄付与三分高直

同 仕舞 六十四匁三分

但、廿七日仕舞与同直段



今廿九日寄付

一、筑前米帳合 三俵付 六十五匁

内味一石付 同直段

但、廿七日寄付与三分高直

今廿九日寄付

一、同 正米 一石付 六十二匁

右同断

一、同 三俵付 同直段

同日御書上直段

一、同 一石付 六十二匁

但、廿七日直段与七分高直

右同断

一、同 三俵付 同直段

同日引方直段

一、同 一石付 六十二匁

〔四丁裏〕

右同断

一、同 三俵付 同直段

右之通御座候、以上

米方年行司印

卯正月廿九日

丑年

一、中国米 一石付

上	六十一匁九分	広嶋
中	六十一匁三分	長門
下	此節無御座候	

寅年

一、同 一石付

上	六十匁六分	長門
中	六十匁	広嶋
下	五十八匁四分	備前

丑年

一、西国米 一石付

上	五十九匁七分	肥後
中	五十八匁六分	筑前
下	五十八匁一分	肥前

寅年

一、同 一石付

上	六十二匁	筑前
中	五十九匁九分	肥後
下	五十七匁三分	肥前

丑年

上 五十七匁四分 加賀

一、北国米 一石付

中 此節無御座候

下 右同断

寅年

上 五十八匁一分 出雲

一、同 一石付

中 五十六匁二分 米子

下 右此節無御座候

右之通御座候、以上

卯正月廿九日

米方年行司印

覚

御宿継

上 六十一匁九分 広嶋

一、丑年米 一石付

中 五十九匁七分 肥後

下 五十七匁四分 加賀

一、寅年米 一石付

上 六十二匁 筑前

中 五十八匁四分 備前

下 五十六匁二分 米子

右之通御座候、以上  
文化四年

卯正月廿九日

米方年行司印

右之口々御用紙ヲ以認也、惣会所へも差出事、尤惣会所江出ハ藏名不書、直段計認遣ス事  
〔五丁表〕

雜穀相庭

八七

一、讃岐 五十目五分

升 五十八匁

八七

一、伊予 四十七匁

升 五十四匁

八五

一、中国 五十匁

升 五十八匁八分

石

一、越後大豆 四十六匁

石

一、伊予大豆 五十五匁五分

石三

一、筑後大豆 五十六匁五分

升 五十四匁九分

一、大麦 此節無御座候

石三

一、小麦 五十一匁

升 四十九匁五分

五十匁位

右者今廿三日之相庭ニ而御座候、尤於市場売買無御座候分ハ、凡位直段ニ而御座候、以上、

文化四年

卯二月廿三日

米方年行司印

惣御年寄中

右雜穀相庭書、凡八日目位ニ而惣会所江差出、晦日相庭ハ其月中之分相認、惣会所并代官所両所江遣ス〔翻刻終わり〕

### 三、史料の内容紹介

本史料は、大別すると（一）米方年行司の新役・古役交代時における大坂町奉行所とのやりとり、（二）同じく交代時に新役・古役の間で交わされた儀礼、（三）正月四日の初相場から二月十日の初午に至るまでの米方年行司の業務、（四）大坂町奉行所に提出する相場書の様式、の四点から構成される。初午で記録が途絶えていることは残念であるが、以上に挙げた点は、いずれも本史料によつて初めて明らかになる内容を多く含んでいる。紙幅の都合上、特にその必要があると判断した箇所についてのみ、以下に説明を試みる。<sup>14</sup>

（一）について、米方年行司の任期が一年で、毎年末に惣年寄立ち会いの下に交代されることは従来から知られていたが、該当事者が現職の町年寄であつた場合に、別途書付を提出していたことが一丁裏の記述で明らかになる。すなわち、町年寄を勤めているため、米方年行司役は赦免願いたいとする書付を提出し、これに対して大坂町奉行所与力が、町年寄としての業務に差し支えが生じた場合には、月行司がこれに代わるべき旨を指示する流れが記されている。書付が雛形の形で記されていることから、富子家に固有の対応ではなく、一般的対応であつたと推定される。形式的とは言え、町年寄を兼帯する場合には、こうした手続きをとる必要があつたのである。また、米方年行司在任中は諸役が免除されたことも知られてきたが、他町に屋敷を保有している場合でも、同様に町役が免除される慣行にあつたことが分かる（二丁表）。

（14）史料文中に出てくる大坂米市場に固有の用語について、全てを紹介することは紙幅的にも、筆者の能力的にも叶わない。用語の解説を必要とする読者諸賢におかれては、前掲註八の拙著、索引を適宜活用して頂きたい。不十分ながら、主要な用語については解説を与えているつもりである。

(二) は、近世における町人の儀礼が窺える貴重な記述である。二丁表末尾から二丁裏の記述によれば、新役・古役が対座し、古役筆頭の者が新役の二人目に、新役筆頭の者が古役の二人目に、といった形で千鳥がけに盃を交わしていく「千鳥の盃」を挙行し、歓談を経て、古役から退座する流れであったことが分かる。

(三) について、堂島米会所では、公的には一月八日より相場が開かれる決まりであったが、大坂米市が近世初期の豪商・淀屋の店先に発祥したことに因んで、毎年一月四日と五日は「初相場」と称して、淀屋橋で取引が行われるならわしであった。これまでその具体的な場所は不明であったが、十九世紀初頭の段階では多田屋方にて行われていたことが分かる(二丁裏中段)。また、堂島米会所における正米商内(スポット取引)の始値に当たる「言合」を決定する過程や、代表取引銘柄である「建物米」を決定する入れ札の過程の詳細が判明するが、概要は既に先学において紹介されているため、詳述は避ける。

(四) について、三丁裏中段より五丁表にかけて、合計五種の相場書が例示されている。大坂町奉行所に相場書を提出することが米方年行司の業務に含まれていたことは従来から指摘されてきたが、相場書の内容や形式については明らかにされてこなかった。

三丁裏から四丁表にかけて示されている第一の相場書について、各銘柄の右肩に記されている「石」、「石四」、「九八」といった記号は、それぞれ米切手一枚にて受け取ることでできる米の量を示している。各藩が大坂で発行し、堂島米会所で取引された米切手の額面は十石に統一されていたが、藩によって受け取ることでできる米の正味量は異なっていた。<sup>(15)</sup>「石」とは十石につき十石、「石四」とは十石につき十石四斗、「九八」とは十石につき九斗八升をそれぞれ意味する。肥後米以下の左側に「升」と記して価格が記載されているが、これは十石につき十石と見なした場合の、一石当たり価格を示している。なお、大坂米市場では、価格を表記する際には米十石ではなく、米一石当たりの価格を用いた。

第二、第五の相場書にも「升」、「三俵付」、「一石付」といった記載が見受けられるが、これらについても右と同様に理解すべきものである。例えば、四丁表中段以降に示されている第二の相場書には、筑前米帳合の価格、すなわち筑前米を建物米とする先物価格が示されているが、「三俵付」の価格と、「内味一石付」の価格が二通り示されている。筑前蔵の米切手は額面が三十俵（＝十石）であったため、三俵で一石に相当する。したがって「三俵付」の価格と「内味一石付」の価格は「同直段」となる。藩によっては、二十五俵で十石となる四斗俵を用いる場合もあり、その場合は「三俵付」の価格と、「内味一石付」の価格は相違することになる。

このように、米切手の額面は十石に統一されていたとはいえず、それに相当する蔵米の量は藩によって異なり、銘柄毎の個性に留意すべきであることは、かつて岩橋氏が強調した点でもあるが、多くの研究者は銘柄間の差を意識せずに、「大坂米価」という抽象的な名称で「米一石に相当する価格」として参照している。ここで紹介した相場書が端的に示している通り、米切手一枚当たりの価格と、正味の量としての米十石の価格は、異なる価格として表記されていたのであり、「大坂米価」を参照する際には、この違いに留意せねばならないことは、改めて強調される必要がある。

また、二通りの価格記載がなされていたことそのものが、重要な意味を含んでいる。すなわち、大坂米市場は蔵米を取引する市場でもあり、同時に米切手という金融商品を取引する市場でもあったという、大坂米市場の両義性が示されているのである。<sup>(18)</sup>

(15) 米切手の概要については前掲註八の拙著七一八〇頁、大名毎の十石当たり正味含有量については、島本得一『蔵米切手の基礎的研究』産業経済社、一九六〇年、二七―三二頁をそれぞれ参照のこと。

(16) 右掲島本書、三一頁。

(17) 岩橋勝『近世日本物価史の研究』大原新生社、一九八一年、一三六―一四五頁。



米切手は一枚当たり十石の蔵米との兌換を約束する証券であったが、各藩ともに蔵米在庫量以上に米切手を発行することを常とし、蔵米の兌換請求を受けた場合に、蔵米を渡すのではなく、現銀で米切手を買取るともしばしばであった。<sup>(19)</sup>そして米切手の価格は、蔵米の品質のみならず、各藩の財政力も加味して形成されていた。<sup>(20)</sup>米切手の価格はもはや「蔵米十石」の価格と一対一で対応するものではなく、各藩が発売した金融商品の価格と理解すべきものとなっていた。

米切手を投機対象とし、転々売買のみを目的とする者にとっては、米切手一枚当たりの価格を参照すれば事足りる。それが正味でどれだけの量の蔵米と兌換されるのかは、彼らの関心の外側にあった。しかし、米の実需家にとっては「内味」の価格も同時に重要であった。それゆえに、二通りの価格記載が行われたと考えられる。

米切手一枚は米十石との兌換を約束するものである、との通説的理解は、概念上は正しいが、市場のレベルでは必ずしも当てはまらない。究極的には、あるいは形式的には、米切手の価値が蔵米との兌換が約束されていることによって生じている以上、堂島米会所における米切手価格を「米価」と表記することは誤りではないが、その内実を理解しておくことが必要である。

## おわりに

市場という抽象的な機構を論じて事足れりとするのではなく、市場のレベルに下りて流通のあり方を論じ、背後にある構造を浮き彫りにする。岩橋氏の提唱するこの手法を、本稿が実践できたかと言えば甚だ心許ないが、ここに紹介した相場書における価格記載の形式一つから、大坂米市場の特質を窺い知ることができた点は

強調しておきたい。

当時の米商にとって、本稿が指摘した内容は「当たり前」の事柄であったと考えられる。しかし、その「当たり前」の事柄が十分に明らかにされてこなかった所に、大坂米市場研究の抱える問題が示されている。そして同時に、大坂米市場研究の更なる発展の余地をも示しているのである。

〔附記〕史料翻刻、および解説に際して、湯木美術館学芸員の倉林重幸氏よりご助言を賜った。お名前をここに記して謝意を表したい。

- (18) 大坂米市場が事実上金融市場として機能していたことについては、前掲註八の拙著において強調した点ではあるが、相場書にもかかる特徴が示されていることは興味深い。
- (19) 前掲註八の拙著、二〇二―二九二頁。
- (20) 前掲註八の拙著、一〇〇頁。